

《資料紹介》 平安京左京八条二坊十五町出土の錢貨鑄型

山本雅和

はじめに

J R 京都駅周辺は平安京南東部の左京八条二坊・三坊にあたっており、また、鎌倉時代から室町時代にかけては東寺領八条院町の故地でもある。

この地域は京都駅に近接するという立地から、1970年代より大型建物や地下街建設工事などともなう発掘調査が行われており、さらに1990年代中頃以降からはJ R 京都駅ビル改築工事や周辺の再開発事業ともなう広面積の発掘調査を実施する機会が増加した。一連の調査では平安時代から室町時代にかけての多数の遺構・遺物を検出しており、なかでも工房や炉などの遺構、鑄型・埴塼・鞆羽口などの遺物から銅製品鑄造生産の盛行が明らかとなってきている⁽¹⁾。

筆者は以前に左京八条三坊三町からまとまって出土した錢貨鑄型について資料紹介を行い⁽²⁾、これを契機として左京八条二坊・三坊から出土した錢貨鑄型を集成し、考察を加えてきた⁽³⁾。しかしながら、その際左京八条二坊十五町出土鑄型に限っては、遺物写真に簡単な解説を行うのみで、実測図および観察結果を掲載する機会を失っていた。ここにその詳細を紹介することにより責を果たしたいと考える次第である。また、合わせて新たに得られた知見についても報告することとしたい。

1. 調査の概要

今回紹介する錢貨鑄型が出土した調査地は、京都市下京区塩小路通油小路東入南不動町地内に位置し、平安京左京八条二坊十四町・十五町および八条坊門小路にあたる（図1）。調査の概要

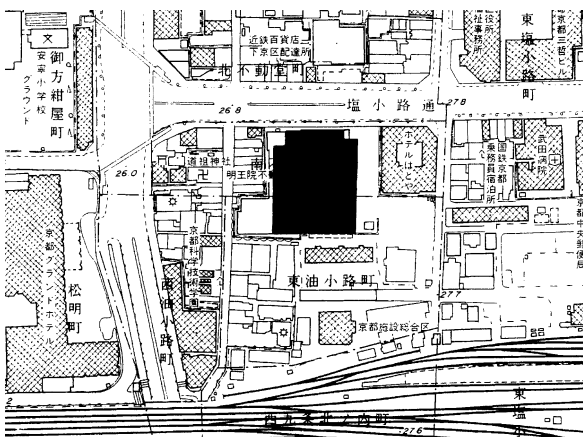


図1 調査位置図（1：5,000）



図2 調査区西側全景（北東から）

は鈴木廣司氏により報告されており⁽⁴⁾、以下に関連する要点をまとめておく。

発掘調査は1997年2月から1998年2月にかけて実施した。調査面積は約2650m²である。調査では平安時代後期から室町時代初頭の八条坊門小路路面・側溝、平安時代後期の井戸・溝、鎌倉時代から室町時代の井戸・土壇・柱穴・炉・埋甕・木棺墓、江戸時代の井戸・溝・土壇などを検出した(図2)。

鎌倉時代から室町時代にかけては、八条坊門小路に面して間口約5～6m、奥行き15m以内の小規模な掘立柱建物が建ち並ぶ状況が復元でき、大型の方形鑄造炉や鑄型を焼成したと考えられる炉、坩堝あるいは取瓶に転用したと考えられる銅滓が付着した土師器皿を集積した土壇などを検出した。また、鑄型・坩堝・鞆羽口・屏風・金属滓などの鑄造生産に直接関連する遺物が多量に出土したほか、製品の細部を丁寧に仕上げるために用いた砥石なども確認した。こうした遺構・遺物の状況から調査地で活発な鑄造生産が行われていたことは明らかである。

銭貨鑄型はいずれも小破片で、すべて八条坊門小路北側の十五町から出土した。出土遺構は銅滓が付着した土師器皿を集積した土壇、掘立柱建物裏側に位置する別々の5基の土壇および包含層である。いずれも14世紀前葉から中葉に属する。それぞれからの出土点数は1～2点にすぎず、鑄型をまとめて再利用もしくは廃棄しようとした状況は看取できない。むしろ、鑄造生産のサイクルの中で使用済の鑄型破片が近傍の遺構埋土に混入した状況を推定できる。

2. 銭貨鑄型

銭貨鑄型は9点出土した(図3)。いずれも小破片に割れており、完形に接合することはできない。しかし、個々の破片の形状を総合すると、銭面の中央に湯道がとおり、両側に堰と銭部が配してある形を復元することができる。この形態は近隣で出土している銭貨鑄型と共通しているので、分類は前稿と同様に銭面が片面にしかないものをA類、両面にあるものをB類とする⁽⁵⁾。A類はさらに銭部に銭銘のないA1類と銭銘のあるA2類に細分することができるが、左京八条二坊十五町出土鑄型の中には確実なA1類は含まれていない。

図3-1～7はA2類で、4つの小破片を接合することができた図3-7でも長さ8.3cm、幅4.8cmにすぎない⁽⁶⁾。厚さは粗土部分の相違から薄いもので約0.6cm、厚いもので約1.6cmになる。すなわち断面図にみるように、粗土部分の成形の形状は少なくとも図3-1・2、図3-3・4、図3-5～7で相違があり、これらが別個体の破片であることを示している。なお、図3-9はA類に属するが図3-1～7とは特徴が異なるため後述することとする。

銭面の部分は平坦で粗土の上に1～3mmの厚さで真土を塗り重ねる。裏面は粗土のままでほぼ平坦である。ナデなどの調整痕は認められない。図3-4・5では銭面と直交する側面が残存している。裏面と同様に平坦で調整痕は認められない。また、側面でも粗土部分の成形の形状は図3-4と図3-5で異なっており、これらが別個体の破片であることを裏付ける。なお、図3-5では側面が銭面よりも高く立ち上がっていることにも注目しておきたい。

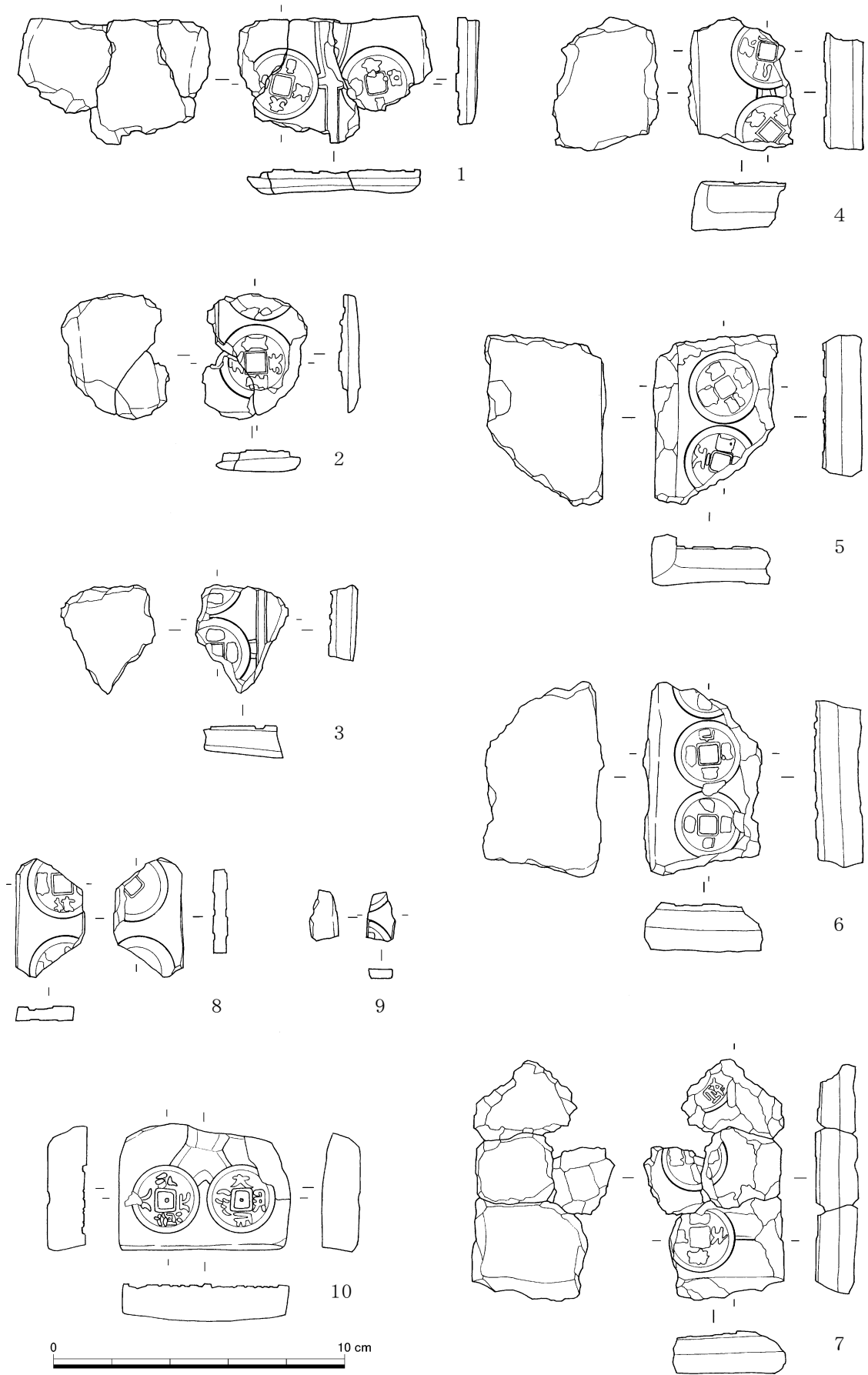


図3 左京八条二坊十五町出土錢貨鑄型・土製品実測図

粗土部分は図3-3～7はスサとして粉殻を多量に混入する。これに対して、図3-1・2は細かい藁のような繊維質の細片を多量に混入する。いずれも砂粒の混入は少ない。色調は淡橙色・淡黄色・灰白色で焼け締まっている。一方、真土部分はきめが細かく、直径約0.5mmの非常に細かい白色粒を含み、表面には多量の雲母が撒かれている。色調は灰色・黒灰色で粗土部分に比べるとやや焼きがamai。

図3-1は湯口部分の破片である。湯口は端部に向かって少し開く形をしているが、凹みは浅く不明瞭である。湯口の先には幅4mm・深さ1mmの湯道がまっすぐに伸びる。湯口と湯道の接続部両側には湯道と直交して銭部につながる堰が加工される。

図3-2～6は中間部分の破片である。中央に湯道がとおり、両側に銭部が並ぶ。湯道は図3-3では幅3mm・深さ1～2mmの断面逆台形である。他の破片では破損しているが、残存部分から同様の形状であったと推定できる。銭部につながる堰は確認できるものはすべて湯道と直交する。幅4～5mm・深さ1mmである。銭部は相接する状態で並んでおり、中には図3-4のように銭部をつなぐ堰が加工されるものがある。銭部の直径は2.3～2.5cmで、外縁・内郭部分の段の微妙な痕跡を認めることができる。銭部の向きは必ずしも同一方向ではない。

図3-7は先端部分の破片である。図3-5・6との粗土部分の成形の形状の共通性からみて、先端の鋭角部には図3-5の側面のように銭面と直交する小口面が立ち上がっていた可能性が高い。湯道は残存していないが、銭部につながる堰は不明瞭ながらも湯道と直交する位置にある。銭部の形状は中間部分と共通する。なお、先端の銭部も中間部分の銭部と一列に並び、湯道寄りに間隔を狭めていないことに注目しておきたい。

図3-8は唯一のB類の破片である。厚さは4～5mmである。銭部は平坦であるが、側端部は銭銘のないほうにわずかに反っている。直径約0.5mmの非常に細かい白色粒を含む真土のみで作られており、表面には両面とも多量の雲母が撒かれている。色調は灰色・黒灰色であるが、側端部は淡橙色の部分がある。

湯道・堰は残存していないが、銭部はA類と同様に湯道に沿って並んでいる形状を復元できる。一方の面の銭部には銭銘があり、もう一方の面の銭部には銭銘がない。銭部の直径は2.3～2.4cmで、外縁・内郭部分の段の微妙な痕跡を認めることができる。なお、銭銘のない方の銭部のひとつ（下側のもの）は銅銭を押し付けた際の型ズレの痕跡がある。

図3-9はA類に属するが、破片が小さすぎてA1類かA2類かは不明である。裏面は平坦で調整痕は認められない。銭銘が片面にしかないことを除けば他の特徴はB類である図3-8に共通する。すなわち、厚さは3mmである。銭部は平坦である。直径約0.5mmの非常に細かい白色粒を含む真土のみで作られており、表面には多量の雲母が撒かれている。色調は灰色・淡橙色である。湯道・堰は残存していないが、銭部は湯道に沿って並んでいる形状を復元できる。銭銘の有無は不明である。銭部の直径は不確かながら約2.4cmに復元でき、外縁部分の段の微妙な痕跡を認めることができる。図3-9の位置付けについては鑄型の製作技法で考察する。

銭銘の多くは不明瞭だが、判読できた銭銘には次のものがある。図3-1：「元（祐）通寶」、

図3-2：「天聖元寶」、図3-4：「元（符）通（寶）」、図3-5：「（元）（祐）（通）寶」・「（開）元通口（寶か）」、図3-6：「皇宋通寶」、図3-7：「元（豊）（通）寶」・「政□□□（和通寶か）」、図3-8：「祥□（符か）□（通か）寶」。621年初鑄の開元通寶を除くと11世紀から12世紀はじめに北宋で初鑄された銅錢で、いずれも日本国内出土模鑄錢の中でも出土量が多い錢銘である⁽⁷⁾。

また、錢貨鑄型ではないが図3-10は銅滓が付着した土師器皿を集積した土壙から出土した土製品である。瓦器鍋の口縁部を平坦に削り、片面に湯道・堰・錢部を加工する。錢部には文字を意識した線刻があるが、意味不明で判読できない。熱を受けた痕跡がないので鑄型として使用されたものではなかったことがわかる。錢貨鑄型を意識した遺物として合わせて紹介する。

3. 鑄型の製作技法

以上の鑄型の観察結果を踏まえて、鑄型の製作技法について検討する。

まず、A類の土台となる粗土を用意する。図3-3・4、図3-5～7にみたように、この工程は2段階以上に分けて行われた。この工程の中で図3-4・5のように側面が形成される。重要なことは側面が裏面・錢面と直交して立ち上がっていることである。ここに錢貨鑄型を成形するための箱形の型が存在したことを想定する。すなわち長方形の箱の内側の底面・側面・小口面に粗土を敷き、押し付けて鑄型土台を成形したのである。裏面・側面がともに平坦でナデなどの調整痕が認められないことはこれを裏付ける。

土台を成形したあとは次の手順が復元できる。粗土の表面を平坦に調整する。→真土を重ねる。→雲母を撒く（雲母は剥離材として用いられた）。→湯道となる鑄棹と母錢を押し付ける。→雲母を撒き、薄い真土を押し付ける。→雲母を撒く。→（繰り返し）。この間、側面には、順次、粗土が積み上げられた。最初の真土が側面の粗土の上にひろがる図3-4はこの可能性を示している。また、側面が錢面よりも高く立ち上がる図3-5では先行して側面を成形したことになる。図3-4・5の錢部の端から側面の粗土までの間隔と図3-8の錢部の端から側端面までの間隔がほぼ合致していることからみても、数回にわたって鑄棹と母錢を挟み込みながら真土を積み重ねる工程があったことは間違いない。

積み重ねの最終段階では、最後に押し付けた真土の上に粗土をおいたと考えられる。図3-3～7に比べて粗土部分が薄い図3-1・2はこの部分に相当する可能性が推定できる。また、真土のみのA類である図3-9は粗土をおくことを省略したものとして位置づけることも可能である。積み重ねられた鑄型の上下の両端部分がA類、挟まれた部分がB類になるのである。以上の成形工程のあと、鑄型はいったん分解され、鑄棹・母錢を取り外し、湯道と錢部をつなぐ堰が加工される。錢部の間隔があいてしまった図3-4のような場合は錢部をつなぐ堰も加工された。そして、乾燥・焼成の工程を経て、鑄型ができあがることとなる。なお、錢銘の向きを揃えることは意識されているが、図3-3～7に錢銘があること、その一方で図3-1・2にも錢銘があり、図3-8では錢銘がないほうの錢部に型ズレの痕跡があることから、錢銘は上面・下面の両方に向けられ

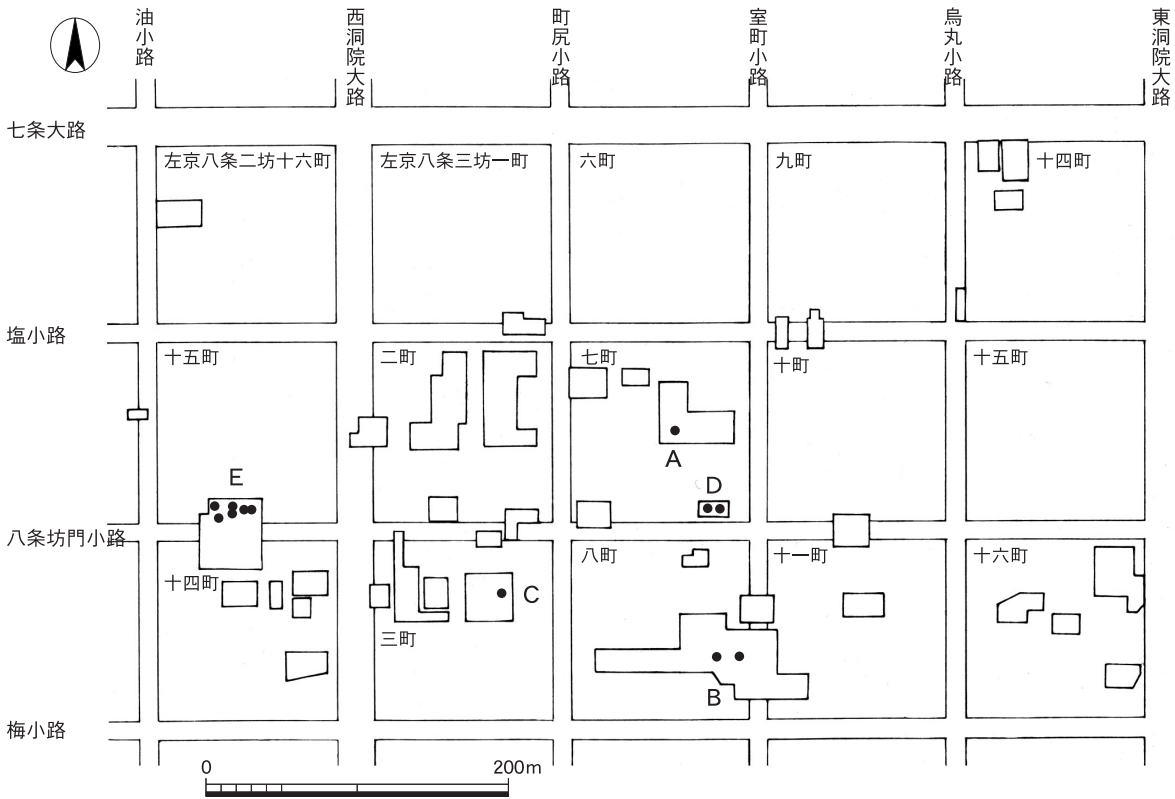


図4 銭貨鑄型出土位置図

る場合があったようである。

ここで、もう少し、銭貨鑄型の型について考察する。湯口の加工技法は図3-1に残された痕跡が不明瞭であるため確定することができない。可能性としては湯口の形の凸型を嵌め込む、湯口の形に合わせて真土を充填しない、全体を成形したあとで割り込みを入れて湯口を加工する、などの方法が想像できる。いずれの技法が採られたとしても、型の湯口部分の小口面を閉塞することは必要ではなかったであろう。また、型の上面は鑄型の製作手順から考えれば開放されていて、蓋がなかったことは確実である。積み重ねによる鑄型の高さは、型の側面の高さにより制約された。というよりも鑄造に適した高さに型を製作したというべきであろう。これらをまとめると、銭貨鑄型の型は底面から両側面・先端部の小口面の3方が立ち上がる長方形の箱形の形状を推定することができる。

4. 左京八条三坊出土銭貨鑄型との比較

銭貨鑄型は八条二坊十五町（図4-E）の他に八条三坊三町で1地点1遺構（図4-C）、同六町で1地点2遺構（図4-B）、同七町で2地点3遺構（図4-A・D）から出土している。時期は八条三坊三町出土鑄型が13世紀後半、これ以外は14世紀に属する。これらの中では八条三坊三町出土鑄型が最もよくまとまっているが、まずは八条二坊十五町出土鑄型と同時期の鑄型との比較を行ったのち、八条三坊三町出土鑄型との相違を明らかとしたい。

図5-1・2は八条三坊六町の14世紀中葉の別々の柱穴から出土した（図4-B）⁽⁸⁾。図5-1は

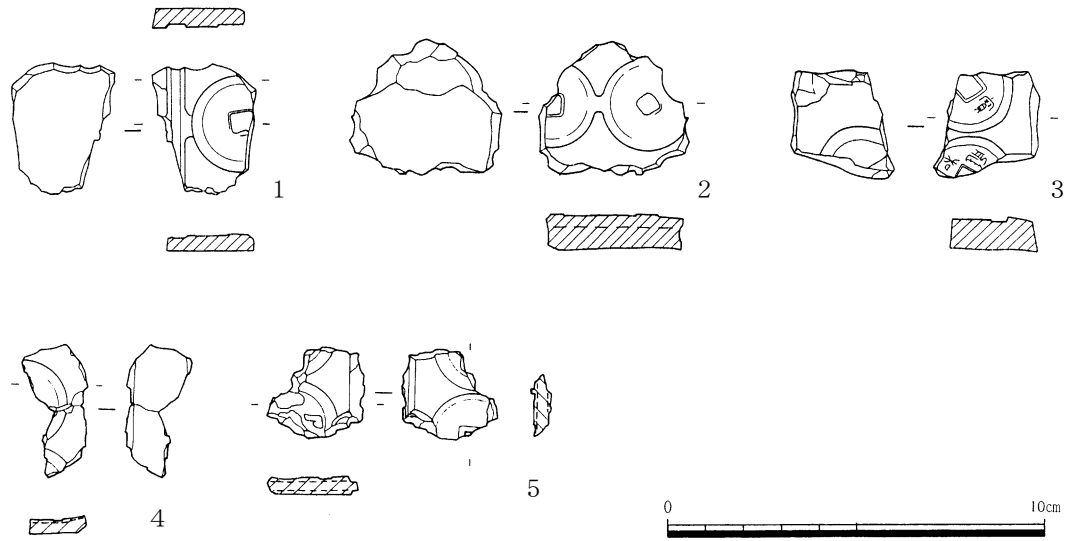


図5 左京八条三坊六町・七町出土錢貨鑄型実測図

A 1 類の中間部分の破片である。厚さは 3 mm である。錢面の部分は平坦で真土のみで作られる。裏面は平坦でナデなどの調整痕は認められない。湯道は幅 5 mm・深さ 2 mm、錢部の直径は 2.5 cm で、堰は湯道と直交する。これらの特徴は図 3-9 と一致する。

図 5-2 は A 1 類の先端部分の破片である。厚さは 1 cm である。錢面の部分は平坦で粗土の上に 3 mm の厚さで真土を塗り重ねる。裏面は平坦でナデなどの調整痕は認められない。これらの特徴は図 3-3 ～ 7 と一致する。なお、錢部の直径は 2.4 cm であるが、湯道・堰はない。これは先端部で湯道が二股に枝分かれして両側の錢部につながるためである。この形状は八条三坊三町出土鑄型と共通する。

図 5-3 は八条三坊七町の 14 世紀の遺構から出土した (図 4-A) ⁽⁹⁾。B 類の中間部分の破片である。厚さが 8 ～ 9 mm あり B 類としては他に例がない。

図 5-4・5 は八条三坊七町の 14 世紀の土壌と溝から別々に出土した (図 4-D) ⁽¹⁰⁾。図 5-4 は A 類の中間部分の破片であるが、A 1 類か A 2 類かは不明である。厚さは 5 mm である。錢面の部分はわずかに反っており、粗土の上に 1 mm の厚さで真土を塗り重ねる。裏面は平坦でナデなどの調整痕は認められない。錢部は直径約 2.3 cm である。これらの特徴は図 3-1・2 と一致する。

図 5-5 は B 類の中間部分の破片である。厚さは 5 mm である。錢面の部分は両面とも平坦で粗土の上に 1 mm の厚さで真土を塗り重ねる。湯道は幅 3 mm 以上・深さ 1 ～ 2 mm、錢部の直径は 2.3 ～ 2.4 cm で、片面には錢銘があった痕跡が残るが剥離しており判読できない。堰は湯道とほぼ 45 度の角度でつながる。堰が湯道と斜行する形状は八条三坊三町出土鑄型と共通する。また、粗土を用いることは B 類としては他に例がない ⁽¹¹⁾。

八条三坊六町・七町出土鑄型はそれぞれに特徴がみられるが、ここでは 3 点の A 類すべてにおいて、裏面は平坦でナデなどの調整痕が認められないことに注意したい。すなわちこのことからこれらの鑄型は八条二坊十五町出土鑄型と同様、箱形の型を用いて成形されたことが推定できる。出土地点にかかわらず 14 世紀には、錢貨鑄型を箱形の型を用いて成形する技法が一般化していた

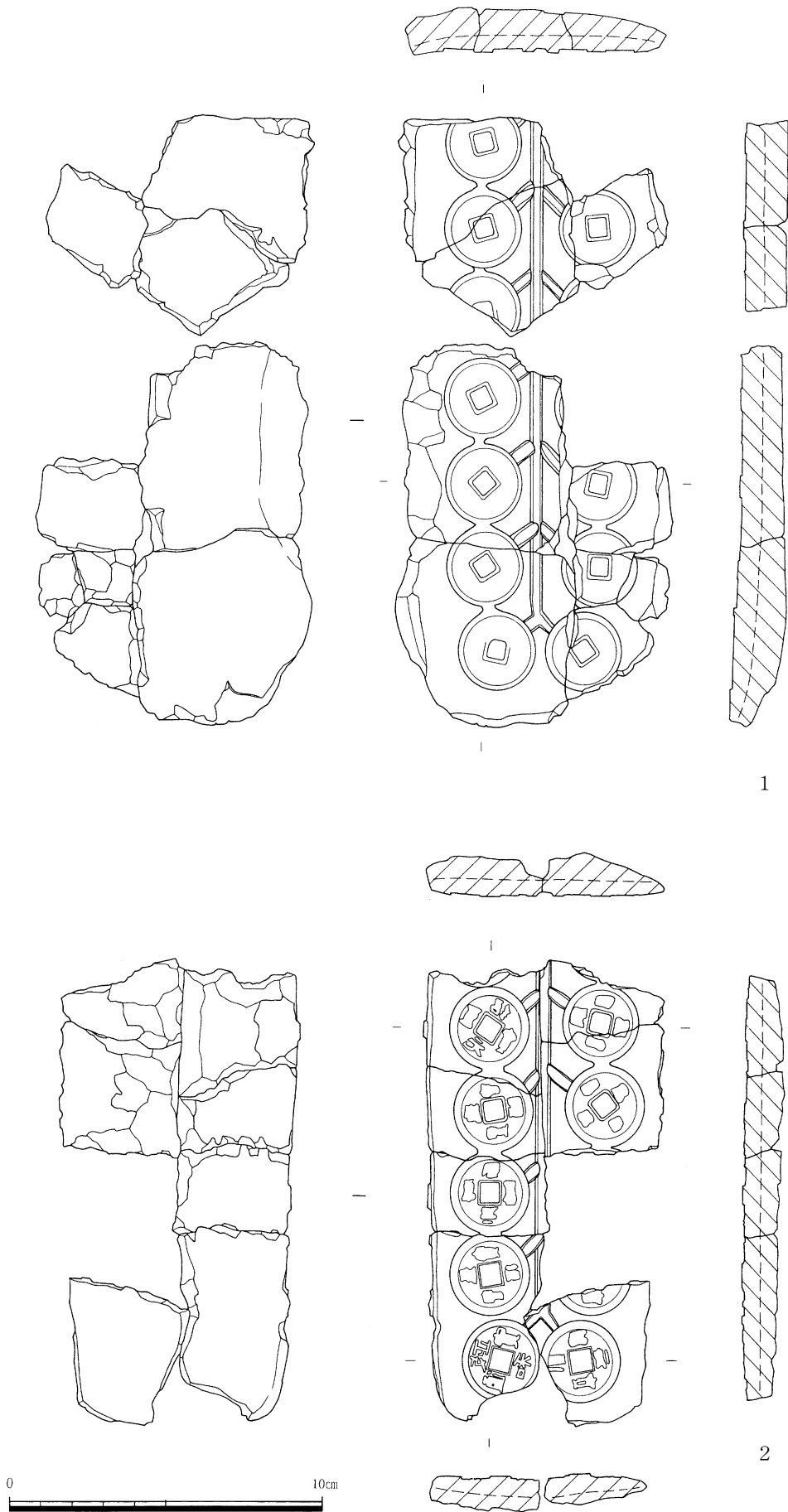


図6 左京八条三坊三町出土銭貨鑄型実測図

のである。

八条三坊三町では町尻小路に面して出入口を開く家屋裏側に位置する土壙から錢貨鑄型がまとまって出土した(図4-C)⁽¹²⁾。A1類(図6-1)・A2類(図6-2)・B類があり、湯口部分から先端部分までの形状や製作手順を明らかにすることができた。詳細は前稿を参照していただきたい⁽¹³⁾。八条二坊十五町出土鑄型との大きな相違を列記すると次のようになる。

A類は厚さが1.5～2cmあり分厚い。A1類の錢面は微妙な凹面となり端部が反り上がっており、対してA2類の錢面は微妙な凸面となる。A類の裏面は端部に向かって緩やかな丸みをもつため明瞭な側面がない。A類の裏面は少し凹凸があり、指の圧痕・丁寧なナデの痕跡がある。中間部分では錢部につながる堰は湯道と約45度の角度で斜行する。先端部分では湯道が二股に枝分かれして両側の錢部につながるため湯道寄りに間隔を狭める。

A類に明瞭な側面がないこと、裏面に凹凸があり指の圧痕・ナデの痕跡があることは重要である。すなわち、これらのことから八条三坊三町出土鑄型は型を用いずに成形されたと推定できる。A類が分厚いこと、A1類が凹面・A2類が凸面になることは傍証といえよう。さらにB類の破片の中には側端面に錢面と直交する方向にA類の粗土と近似する粘土が付着しているものがある⁽¹⁴⁾。側面を閉塞しないままA類・B類を積み重ねて成形したのち、鑄造の際に溶けた金属が漏れることを防ぐために粘土を塗りつけて積み重ねの隙間を補充した痕跡と考える。このことも型を用いなかったために側面が形成できなかったことを裏付ける⁽¹⁵⁾。

成形行程での型の使用の有無は技法上の決定的な相違として評価できる。おそらく鑄型製作の効率化、鑄型の均質化が実現されたことであろう。これは錢貨鑄造の効率化・量産化につながる。逆に八条三坊三町出土鑄型からは、最も初源的な製作状況が想像できる。これが13世紀後半に属することから、14世紀までには型の使用が選択されたのである。

一方、14世紀の錢貨鑄型の中にも、堰が湯道と斜行するもの(図5-5)、先端部分で湯道が枝分かれして両側の錢部につながるもの(図5-2)があり、八条三坊三町出土鑄型と共通する特徴がみられた。また、B類には複数の形状があり、異なる製作技法が採られたことが分かる。成形行程での型の使用を画期としつつ、技法の連続性も認められる状況は、生産者たちの交流と試行錯誤の過程をものがたっているといえよう。

おわりに

以上の検討・考察の結果をまとめておく。

- ①14世紀までに錢貨鑄型の成形工程に型が採用された。
- ②錢貨鑄型の型は底面から両側面・先端の小口面が立ち上がる長方形の箱形と推定できる。
- ③型の採用の前後で共通する製作技法がある。

左京八条二坊・三坊では錢貨のほか鏡・刀装具・仏具・容器などのさまざまな銅製品が鑄造されていた⁽¹⁶⁾。鑄型の出土量からすると錢貨鑄型の割合はかなり少ない方で、最も多いのは鏡鑄

型である。鏡鑄型の成形工程では、すでに13世紀前半の段階で粗型を型で成形していることが網伸也氏により指摘されている⁽¹⁷⁾。錢貨鑄型における型の採用がこの影響を受けていることは想像に難くない。

八条院町の生産は、小規模な生産単位が集積することにより全体の生産が支えられることに特徴がある。個々の生産単位の中で技術革新・技術伝播が行われ、八条院町全体の生産水準が向上していったのである。

註釈

- (1) 網伸也・山本雅和「平安京左京八条三坊の発掘調査」『日本史研究』409 1996年、上村和直「京都『八条院町』をめぐる諸問題」『研究紀要』第8号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年、山本雅和「八条院町を生産」『鎌倉時代の考古学』高志書院 2006年など。なお、それぞれの調査成果の概要は上村2002年、山本2006年の調査一覧表を参照していただきたい。
- (2) 山本雅和「平安京左京八条三坊出土の錢鑄型」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年。
- (3) 山本雅和「平安京八条院町と錢貨鑄型」『中世の出土模鑄錢』高志書院 2001年、山本雅和「平安京八条院町の鑄錢関係遺物」『わが国鑄錢技術の史的検討』奈良国立文化財研究所 2003年など。
- (4) 鈴木廣司「平安京左京八条二坊2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年。
- (5) 注(2)に同じ。
- (6) 注(4) 65ページ、図55に出土した錢貨鑄型写真が掲載されているが、再検討の結果、接合できることが判明した。
- (7) 永井久美男編『中世の模鑄錢』兵庫県埋蔵錢調査会 1994年。
- (8) 「平安京左京八条三坊2」『平成6年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年。
- (9) 『平安京左京八条三坊』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1982年。
- (10) 「平安京左京八条三坊1」『平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年。
- (11) 断面の詳細が観察できないため確実ではないが、図53は厚さの点からみても粗土を用いている可能性がある。
- (12) 「平安京左京八条三坊1」『平成6年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- (13) 注(2)に同じ。
- (14) 注(2) 100ページの図7-18。
- (15) 錢貨鑄型と同じ土壙からは用途不明の板状土製品が出土している。これも型を用いないで製作した鑄型の形状から鑄造の際に必要なとされた遺物である可能性がある。注(2) 104ページの図9、105ページの図10。
- (16) 注(1)に同じ。
- (17) 網伸也「和鏡鑄型の復元的考察」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年。